# シュリー・ラーマクリシュナの預言者としての独自性

### 2012年3月18日

シュリー・ラーマクリシュナ生誕記念祝賀会

### スワーミー・ジョーティルーパーナンダによる講話

### 於・逗子協会

預言者とは、神の意志を明らかにし、あらゆる苦しみから人類を救済する道を見い出す者である。クリシュナ、仏陀、イエス・キリスト、モハメッドなどは預言者である。私たちの時代のシュリー・ラーマクリシュナもインドの預言者として認識されている。彼らは、自らの人生と教えにより具体的な道を示し、人類を神すなわち究極の真実へと導く。その時代や地域での問題を解決するために、たとえその教えが永遠の真理にもとづくものでも、特定の道を示さなければならなかった。シュリー・ラーマクリシュナが出現したのは、技術が発展し、遠く離れた人たちもまるで隣人のように世界中の人々が身近に感じられるようになった時代である。今やひとつの国で起きた問題は、その国民だけでなく他の国々の人々にも影響を与える。このことからみれば、シュリー・ラーマクリシュナの人生と彼のメッセージは、驚くべきことに、現在の我々の問題の解決においてすべての人類を対象としていることがわかる。ここにシュリー・ラーマクリシュナならではの明白な特徴があることに気づかされる。

私の意見では、彼の体験として最も効力のあるものは、宗教の調和を発見したことであり、特にこれこそは、現代のように異なる宗教同士が相互に破壊しあう状況から人類を救うために最も必要とされていることである。古代から現代まで調べてみれば、異なる既存の宗教を自ら実践し、すべての宗教は、いかなる名前で呼ぼうとも同じ神への道を導くものだと確信した者は、シュリー・ラーマクリシュナだけなのである。

さらにシュリー・ラーマクリシュナが解決した大きな問題は、神、自然、生命ある存在に対する見解についてである。二元論の見解では、神の統治のもとに神、自然、個人は別々の存在であるとみる。世界の主な宗教はこの見解を好む傾向にある。次に、自然と生命ある存在は、神の体の一部であり、神がこれらすべての魂であるとみる。この見解は、限定的非二元論として知られている。　3番目の見解は、神を究極の超越した絶対の存在とみる。神こそが現実であり、自然や生物は、もともと無知により究極の存在を知り得ない私たちの限界ある精神と感覚を通してみえた現象にすぎない。これらの矛盾する見解は、異なる宗教を持つ人々の間での愛に対して立ちはだかる大きな根本問題であった。シュリー・ラーマクリシュナは自らの直接的な体験によってそれらすべての見解が真実であることを発見した。

霊的な成長の段階の違いによって、神の体験は違うのであり、これらすべての見解には矛盾はありえないのだ。彼の独自的な体験によって、すべての宗教の間に親睦をもたらすことが可能となった。そして、それは全世界で始まっている。数多くの世界宗教会議が、近年では世界各地で開催され、宗教界のリーダーたちが同じ場に集い、平和に相互に尊敬を持ちながら話し合うのである。

次に現代ではほとんどの国で直面している　　社会における女性の地位の問題である。世界中で女性達は、人生のあらゆる面において男性と対等に当然あるべき地位を得ようと最善の努力を尽くしている。最近は、このために地球上のあらゆるところで会議やデモンストレーションが行われている。女性の向上を支援したシュリー・ラーマクリシュナの特徴ある役割は広範囲に影響を与えている。

もちろん、彼は決してこれらの問題を解決するつもりであるなどとは公言しなかった。むしろ、彼は完全に自分のエゴを消すことができ、「私」だとか「私がこれをする」などという言葉はいっさい口にさえ出すことができなかった。彼は、自分を彼を通して達成される神の意志の道具とみなしていた。どんなことであっても、彼には、女性に対する我々の悪しき態度を妨げる強い武器があった。　私たちがブラフマンと呼ぶ究極の真理を、彼は聖なる母カーリーと呼んだ。シュリー・ラーマクリシュナは、このような方法で神の女性的な局面を伝えた。

さらに霊的な修行の初期的段階で彼は女性を彼の霊的な指導者、グルとし、バイラヴィ・ブラフマニと呼んだ。それだけでは充分でなく、人生で最も重要なイベントである彼の結婚についてみなければならない。

イエス・キリストのような預言者は結婚しなかった。学識豊富な学者であり、預言者でもあるシャンカラーチャリヤも結婚しなかった。仏陀やシュリー・チャイタニヤは、より偉大な目的のために妻のもとを去らなければならなかった。このような事柄により、女性は霊的な歩みには障害になるという誤解が人々の間で深まるばかりとなってしまった。しかし、シュリー・ラーマクリシュナの場合は違ったのだ。

彼はサーラダ・デヴィと結婚し、霊的な存在である聖なる母として愛し、彼の霊的な活動の伴侶として彼女を教え、最終的には彼の霊的な職務のすべての責任を彼女に託し、それを彼女は最後まで上手に維持したのだ。それにより彼女は、社会における女性の最高の地位を示す模範となったのだ。ラーマクリシュナの妻を聖なる母として崇拝する例は、私たちすべてにとってユニークなものである。インドではシュリー・ラーマクリシュナの例は、男性の女性に対する姿勢に素早い変化をもたらし確実な地歩を築くようになった特筆すべき出来事である。

シュリー・ラーマクリシュナは、完全に肉欲と金への執着から自らを解放した。彼の人生は、これらに強く惹かれる心を支配することによってのみ最高の平和と喜びに達成できることを証明した。　これらから自分を解放すればするほど、より大きな平和と喜びで心が満たされるようになる。

現代の世界は、すべての宗教がなんらかの形で提唱するこの教えを、忘れ去っているようにみえる。私たちの惑星は、金と物質的な快楽の狂った追求の犠牲となっている。肉欲と拝金主義から生まれた暴力や犯罪により、何百万人もの人々の心は恐れと不安でいっぱいだ。私たちにはそのような偶然から逃れる術はない。

シュリー・ラーマクリシュナの人生は間違った方向に向いた人生を正しい方向に促す指針である。正しい方法で人生を楽しみ、好きなだけ金儲けをすればよい、ただしその前に自らを肉欲と貪欲に惹かれる強烈な誘惑から解放すべきである。ラーマクリシュナにとって世俗とは、肉欲と金という二つの言葉に集約される。霊的な人生のみが平和と至福をもたらし、これらに強く惹かれる心を支配することによってのみ人は霊的になれるのだ。

おめでたい機会や巡礼地などで貧しい人たちや困窮者に寄付をすること、または他の方法で支援することは、世界のあらゆる宗教で極めて重要な霊的な実践とされている。現在の利己的な世界で多くの人々は、自分の慈悲深い行為から、霊的な恩恵を受けることができないでいる。内なる成長に必要な謙虚な姿勢ではなく、むしろそれがエゴの増大になっている。

シュリー・ラーマクリシュナは、この奉仕という行為そのものに新しい局面をもたらした。霊的な気持ちになると彼は言った。「生き物に慈悲を示しなさい！あなたは何者だ、つまらない生き物なんかに慈悲を示せだと？いやちがう、それは慈悲ではない、生き物に内在する神への奉仕なのだ。」これが他人に奉仕するときに、持つべき姿勢なのである。体という神殿に神は、内なる管理者として存在する。それゆえに他者に対する奉仕は、神への奉仕となる。

この姿勢を念頭におけば、困窮者に奉仕する者の心は向上する。そして奉仕を受ける者も、物質的な恩恵を受けるのみでなく、彼自身の中にある高次の存在が目覚めさせられるのだ。シュリー・ラーマクリシュナのこの教えを手がかりに、彼の偉大なる弟子、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは後年、　　貧しい人や困窮者、世界中のあらゆる階級の虐げられた人々に全面的な奉仕を行うために、そしてこれを神に至る道のひとつとして、博愛的な組織であるラーマクリシュナ・ミッションを設立した。

　現代社会に新しい光をもたらすために計り知れないほど貴重な貢献をしたシュリー・ラーマクリシュナを世界がより深く理解するときが、それ自らの歩調で近づいてきている。